京都教育大学ＦＤニュース

No.96
2022 年 1 月 25 日
京都教育大学ＦＤ委員会

****

本学における FD 活動の一環として実施しています「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。

今回の FD ニュースでは、2021 年度教育学部前期授業アンケート結果、2021 年度授業アンケート活用状況及び前期中間アンケート実施結果、第 1 回 FD 研修会について報告いたします。

****

1. 2021年度教育学部前期授業アンケートについて

１．調査の概要

実施期間：2021 年 7 月 15 日（木）～7 月 30 日（金）

対象科目：受講登録者 6 名以上の全授業科目

対象科目数：350，実施科目数：293　（未回収 56，全白紙 1　実施率 83.7%）

実施科目 のべ履修者数：11,145 名，有効回答数：9,308 名　（有効回答率 83.5%）

2021 年前期のアンケート実施率（以下、実施率）は 83.7%でした（図 1）。新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の影響による授業休止の影響で 71.3%に留まった 2020 年よりは実施率は高かったですが、2019 年度以前と比べるとやや低い数値であり、2021 年度も新型コロナによる影響で未実施となった科目があったことが推察されます。一方で、実施科目における有効回答率（有効回答者数÷実施科目履修者数）は昨年同様に高い水準にあり、83.5%でした。なお、2020 年度後期授業アンケートの結果は、新型コロナの影響で未実施科目が多かったため図 1 から除外しましたが、調査実施率は 22.6%、有効回答率は 80.4%でした。

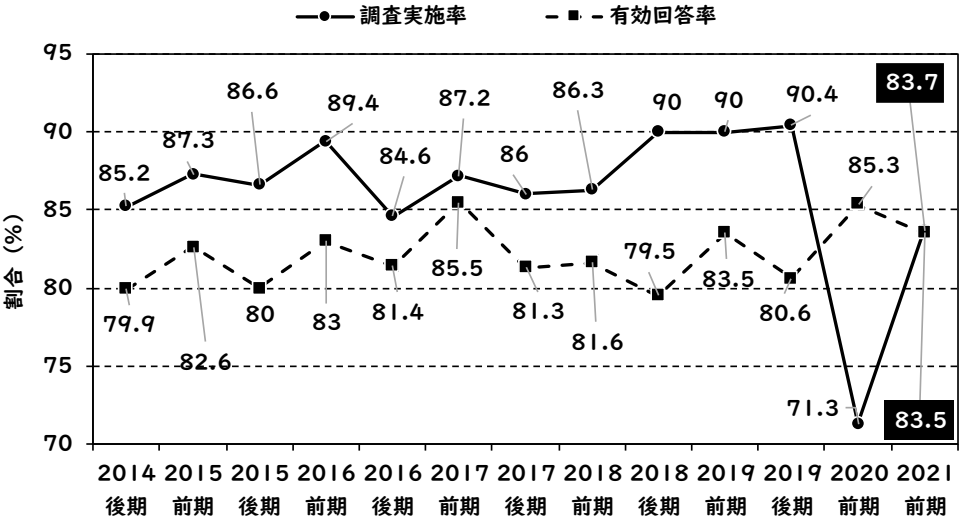

図1　授業アンケートの実施率と有効回答率の変遷（2014年度後期から2021年度前期）
※2020年後期は新型コロナウイルス感染症の影響で未実施科目が多いため除外している

２．結果の概要

（1）　Q１．「授業を選択した動機について」

当該科目を受講した動機は、「必修だから」が 64.1%と最も多く、次に「興味・関心」が 25.1%と続いています。近年の授業アンケートの結果と比較して、各選

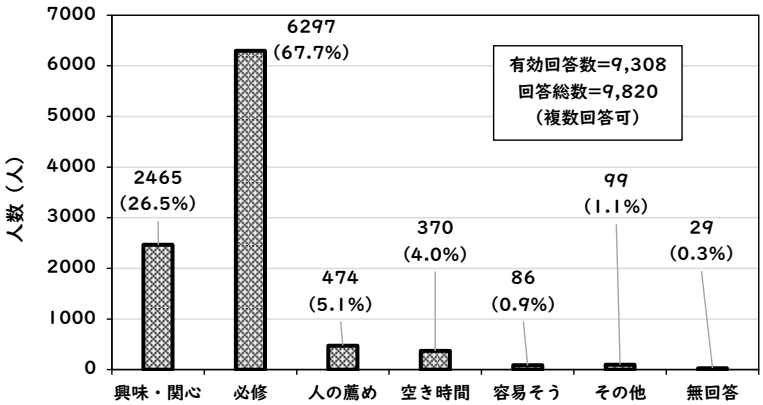

図2　アンケート回答科目に関する受講動機の内訳
※複数選択可のため，回答総数が有効回答数以上となっている。

択肢の人数は回答総数に応じて増減していますが、各選択肢の割合は大きく変わっておらず、受講動機の傾向は変化していないようです。

（2）　Q２からQ１５の結果について

Q2 から Q15 までの回答について、各項目で肯定的と否定的な回答に分けて図 3 に結果を示しています。全体の傾向を見ると、例年のアンケート結果と同様に大部分で肯定的な回答となる傾向でした。

2021 年前期は新型コロナの影響により、遠隔と対面授業を交えた形態（4 月 26 日から 6 月 20 日までは講義・演習が中心の授業は遠隔授業、実技・実験・実習が中心の授業は対面授業、6 月 21 日以降はいずれも対面授業可）と変則的な授業展開でした。【Q7. 授業満足度】の項目を見ると「満足・やや満足」の回答割合は 92.2%であり、昨年度前期と同様にコロナ禍前のアンケート結果よりも高い数値になりました（2018 前期～2019 後期、88.9%）。また、新型コロナの影響を初めて受けた 2020 年度前期の授業アンケートで見られた特徴として、【Q9. 教員になる意欲を高める内容】、【Q11. 体系的な授業】の「とても思う・やや思う」の肯定的な回答割合がコロナ禍前よりもやや高い傾向は継続し（2021 前期、Q9 : 84.8%、Q11 : 91.1%）、近 4 回（2018 前期～2019 後期）のアンケート結果に比べて数ポイント高い数値でした（2018 前期～2019 後期 : Q9, 81.0% ; Q11, 86.7%）。特に、「とても思う」と回答する割合が増加している傾向でした。この変化の要因をアンケート結果から明らかにする事は難しいですが、新型コロナ下での授業実施方法や内容の工夫が学生の評価に影響を与えていることが推察されます。

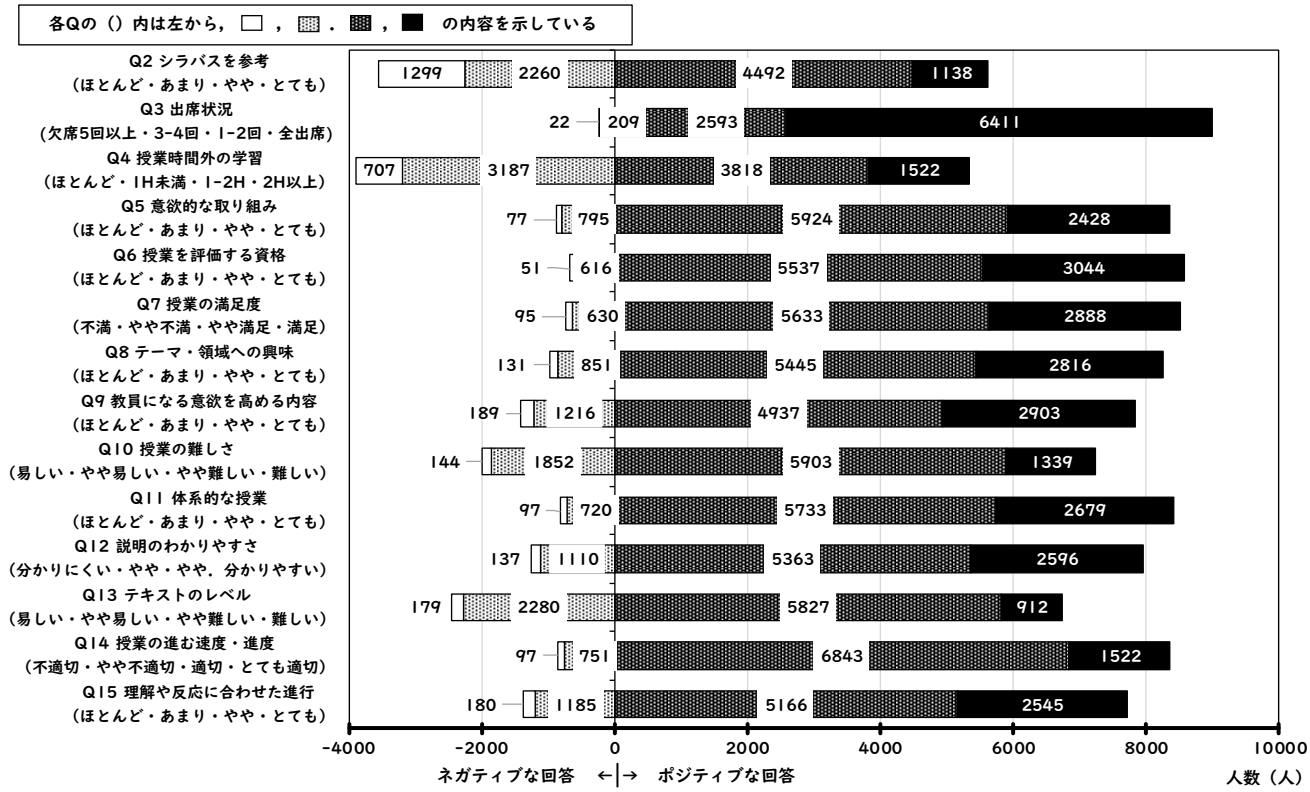

図3　質問項目（Q2～Q１５）ごとの回答の内訳（各系列の内容は各質問項目の欄を参照）

（3）新型コロナ下での Q4. 授業時間外の学習の変化（2019 年度から 2021 年度の推移）

初めて新型コロナの影響を受けた昨年度（2020 年度前期）の顕著な結果として、授業外の学習時間が増加しました（FD ニュース 93 号）。今年度前期は遠隔と対面授業を交えた形態で授業が行われましたが、【Q4. 授業時間外の

学習】の「2H 以上、1-2H」の回答割合は全体の 57.8%と昨年と同様に非常に高い数値でした（2020 年前期、60.0% ; 2018 前期-2019 後期、44.6%）。昨年度の FD ニュースにおいて、オンライン授業の捉え方（例えば、オンデマンド授業を授業外の学習と捉えるなど）が結果に影響を与えた可能性を指摘しましたが、2 年続けて授業外の学習時間が顕著に多かったことは注目すべき結果であると考えられます。

図 4 は 2019 年から 2021 年前期の各科目の Q4 の点数について、点数別の分布を示したものです。図を見ると、2021 年前期では 2H 以上（4.0 点）および 1H 以上（3.0 点以上）の授業外学習が行われた科目は全体の 28.0%であり、2019 年度の 2 割弱よりかなり多く、ほとんどない（1.0 点）とする科目は顕著に少なかったことがわかります。つまり、昨年度に続いて多くの科目で授業外学習時間が多かったと考えられます。さらに、2019 年から 2021 年前期で 3 年間継続してデータがある授業を抽出し（167 科目、担当教員変更科目も含む）、2019 年前期からの点数の変化を図 5 に示しました。結果として、2021 年度は 2020 年度の傾向が維持され、2019 年度前期に得点が低かった群（科目）の授業外学習の得点の増加が維持されたことが見て取れました。

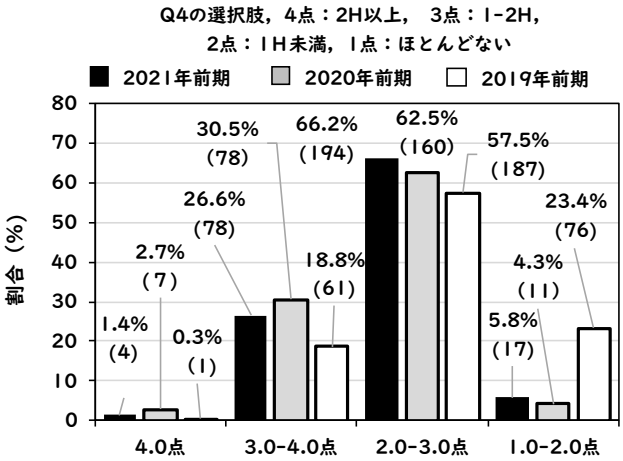

図4　2019年と2020年，2021年前期における各科目の質問項目Q4の平均点別の分布（回答全科目を集計）
＊（括弧）内の数値は科目数を表している

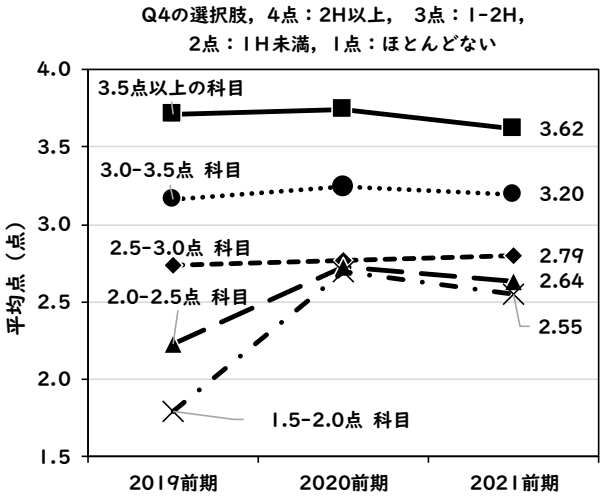

図5　2019年，2020年，2021年前期における同一科目（167科目）での質問項目Q4の平均点の変化
（※授業担当教員が変更した科目も含んでいる）

（4）【Q4. 授業時間外の学習】と【Q7. 授業満足度】の関係（2019 年度と 2021 年度の比較）

図 5 までの結果から新型コロナ禍前後で授業外学習時間に変化がありました。そこで、2019 年と 2021 年の授業外学習時間と授業満足度の関係から、授業外学習時間が満足度に与えた影響を検討しました（図 6、2019 年、325 科目 ; 2021 年、293 科目）。その結果として、2019 年の授業外学習時間と満足度を基準とすると、その両者がともに平均未満（Ⅳに分類）に位置していた科目数が 2021 年に大きく減少していたことがわかりました。さらに、2019 年と 2021 年の両方にデータがあり、2019 年はⅣに位置していた科目（83 科目）のみを抽出すると、Ⅳ⇒Ⅰに移動した科目は 16.9 %、Ⅳ⇒Ⅱへ移動は 42.2 %、Ⅳ⇒Ⅲへ移動は 14.4%でした。これらの結果から、新型コロナにより新たな形態での授業を行う中で、2021 年度では授業外学習時間を確保しながら満足度も向上した科目、満足度を維持しながら授業時間外学習を確保していた科目が多かったことが示されました。

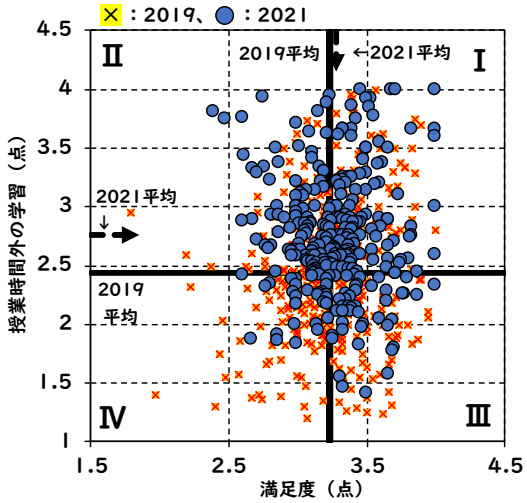

図6　2019年および2021年前期の各科目の授業満足度と授業時間外の関係

また、2021 年度の結果から、授業外学習時間が 2021 年の平均以上の科目（128 科目）を抽出し、満足度が平均値以上（66 科目）、未満（62 科目）の 2 群で各項目の結果を比較してみました（図 7）。この結果から、授業外学習時間が多く満足度も高かった科目は、「Q.10 難易度」や「Q13. テキストレベル」が高い中で、「Q9. 教員になる意欲を高める取組」、「Q.12 説明のわかりやすさ」、「Q.15 理解・反応にあわせた進行」の得点が顕著に高かったことがわかります。これらの結果は、新型コロナ禍で各教員が試みた授業の工夫と関係していると推察できます。FD 研修会でも各教員の様々な工夫が紹介されましたが、これらの内容を教員間で共有し、さらなる授業改善につなげていくことを期待します。

今年度の後期も授業アンケートを実施します。授業に関する自由記述アンケートを個別に実施するなど、授業改善に向けた取り組みを進めていただきますようお願いします。

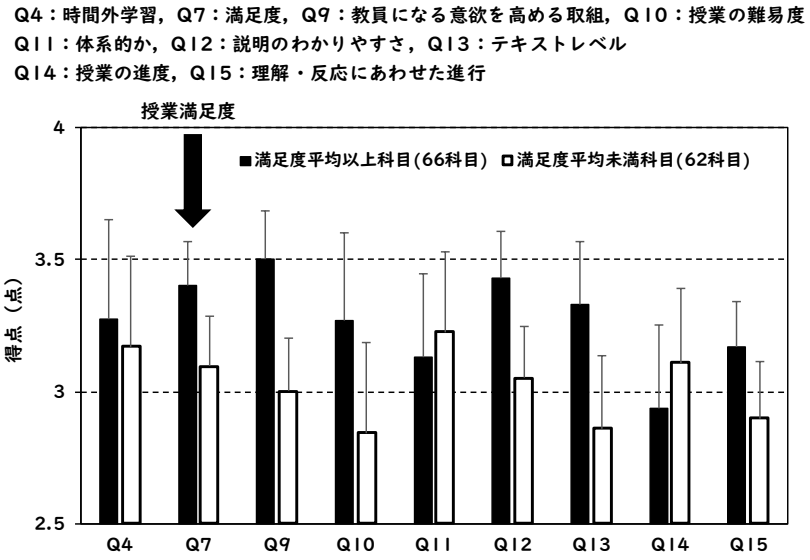

図7　2021年前期・授業時間外学習平均以上科目における、授業満足度の相違による各質問項目の得点結果

2. 2021 年度授業アンケート活用状況調査及び前期中間アンケート実施結果調査

前後期の授業アンケート活用状況の調査結果、2021 年度の授業中間アンケート調査結果を報告します。「1. 2021 年度教育学部前期授業アンケートについて」と合わせてご確認頂き、各授業の取り組みに役立てて下さい。なお、アンケート回収件数は紙面・web を合わせて 51 枚でした（紙、34 件；Google Form、17 件）。

I. 授業アンケート（期末実施分）の活用状況について

問 1. 過去の授業アンケート結果を 2021 年度前期の教育学部の授業に反映させている。
「はい」→40　「いいえ」→4　「過去に未実施」→7　「無回答」→0

問 2. 授業に反映させていない理由についてお聞かせください。
・今年度から赴任・採用のため　・おおむねアンケートの結果が好評であったため　など

問 3. 授業に反映された内容についてお聞かせください。（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数（41）に対する比率
時間外の学習時間を見直した	6	14.6 %
意欲的に取り組めるよう対応した	8	19.5 %
テーマ・領域を見直した	3	7.3 %
教職への意欲・動機が高まるよう対応した	8	19.5 %
難易度を見直した	16	39.0 %
体系的でまとまった授業を心掛けた	7	17.1 %
授業の説明をわかりやすくした	16	39.0 %
テキスト（配布資料など）のレベルを見直した	10	24.4 %

速度（進度）を見直した	12	29.3％
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	9	22.0％
その他	3	7.2％

約8割の先生方が授業アンケート結果を授業に反映していると回答しています。反映内容は、「授業の説明をわかりやすくする」、「速度（進度）を見直す」など、受講生への配慮が多く見られました。「1. 2021年度前期授業アンケート結果」の中で満足度が高まった科目が多いことを紹介しましたが、このようなアンケート結果を踏まえた改善が学生の学びを引き出す魅力ある授業につながっていくと考えられます。今後も、多くの先生方が授業アンケートの結果をご活用いただければ幸いです。

II. 2021年度後期教育学部　授業中間アンケートの実施結果調査について

問1. 独自作成のものも含め授業中間アンケートを実施した。
「はい」→33　　「いいえ」→18

問2. 授業中間アンケートをしなかった主な理由についてお聞かせください。
・リアルタイム授業のため、困難であった。オンライン授業の対応で実施している余裕がなかった。
・webで行っても充実した結果が得られるか疑問であったため。オンライン授業が多かったため、学生の反応調査やアンケートの回収が困難と考えたため。
・講義時間が短くすることを避けるため。　・授業を行う方がより重要と考えるため。
・前期は複数教員で行う授業が大半のため。

問3. 使用した様式について、お聞かせください。
「FD委員会の様式」→28　　「独自の様式」→7

問4. 中間アンケートを実施した結果について、お聞かせください。
「意義があった」→15　　「どちらかというと意義があった」→15
「どちらかというと意義がなかった」→3

問5. 授業中間アンケートの結果について、受講生と話し合ったり、言及したりされましたか。
「はい」→19　　「いいえ」→15　　「回答なし」→0

問6. 授業へ中間アンケート結果を反映された内容について、お聞かせください。（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数（33）に対する比率
時間外の学習時間を見直した	2	6.1％
意欲的に取り組めるよう対応した	8	24.2％
テーマ・領域を見直した	3	9.1％
教職への意欲・動機が高まるよう対応した	6	18.2％
難易度を見直した	4	12.1％
体系的でまとまった授業を心掛けた	5	15.2％
授業の説明をわかりやすくした	11	33.3％
テキスト（配布資料など）のレベルを見直した	3	9.1％
速度（進度）を見直した	7	21.2％
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	10	30.3％
その他	4	12.0％

問7. FD委員会様式の「授業中間アンケート」の設問について、お聞かせください。
「改善の余地あり」→33　　「現状のままでよい」→3　　「回答なし」→0
【「改善の余地あり」回答者の自由記述】
・webアンケートの実施を検討して欲しい。

・「適切だった」、「ちょうど良かった」等の項目がなく、ちょうどいいと思ってもどちらかに寄ってしまうので、これらの項目も入れて欲しい。
・「分かりやすい授業」で高評価をとる最も簡単な方法は、授業内容の難易度を落とすことだが、それは学習効果を落とすことに繋がりかねない。それゆえ、授業内容の難易度と説明のわかりやすさを混同しないように設問を設定して欲しい。例えば、「難易度と比較したとき、授業の説明はわかりやすいですか？」など。

33 名の先生が中間アンケートを実施したと回答しています。その 9 割以上が中間アンケートに「意義があった」もしくは「どちらかというと意義があった」と回答しており、授業改善に有効であったことがうかがえました。結果を受けて改善した内容として、「説明をわかりやすくした」、「受講生の理解や反応を受けとめるようにした」、「難易度を見直した」、「速度（進度）を見直した」、という回答が多く見られました。
アンケートの設問について、多くの先生が現状のままでよいとお答えになっていましたが、設問によっては学生の解釈に誤解が生じる可能性があるというご指摘を頂きました。これらを含め、FD 委員会として授業アンケートの内容等について検討を進めていきたいと思います。

3. 2021 年度第１回FD研修会の報告

「教職大学院の授業について」　講師：教科研究開発高度化系主任　徳岡慶一先生

2021 年 10 月 20 日に、連合教職実践研究科・教科研究開発高度化系主任の徳岡慶一先生より、「教職大学院の授業について」というテーマでご講演いただきました。今回のご講演は、教職大学院への移行をいよいよ来年度に控え、全教員が教職大学院の授業について共通理解と見通しをもつことを目的として企画させていただいたものです。はじめに、中副学長より、教職大学院の目的や、理論と実践の融合の重要性などについてお話がありました。徳岡先生は、連合教職大学院の開設当初の４年間、兼担教員として教職大学院の授業を担当されたご経験をふまえ、院生の視点に立った２年間の学びの見通し、教育学研究科との違いなど、教職大学院のシステムの特色、カリキュラムの特徴をわかりやすくご説明くださいました。また、院生からの指摘（要望）や教員が持ちうる疑問への回答などもご紹介いただいたことにより、これから担当する授業に対してより具体的なイメージを持つことができました。最後に、太田学長から、大切なのは学生が育つことであり、教員の基準で見るのではなく、教壇に立つ学生にとって一番必要なことは何か、専門的な知識とは何かを洗い出す必要があるというメッセージがありました。

参加された先生方からは、「教育学研究科での授業との違いをイメージするのに役立ちました」、「本学の教職大学院における教育課程の体系性について簡潔にご説明いただき、基本的なことをよく理解できました。総論だけでなく教職専門実習のあり方、授業の仕方、認証評価など、各論についてもお話しくださり、勉強になりました」、「教職大学院の教育目的やそこでの授業の工夫について、具体的に理解することができた」、「第 2 回の入試を控えて、よいタイミングだったと思います」など、この時期に教職大学院の授業について具体的なイメージを持ち、理解することができてよかったという感想を数多くいただきました。
その一方で、「少し教職大学院の授業についてイメージはもてたが、教科専門ではどうしたらいいのかまだ迷いがある」、「だいたいわかった。しかしながら、現状、教育学研究科との大きなちがいが認識できるに至らなかった」など、まだ十分な理解に達していないと感じられている先生方がいらっしゃることも事実です。また、講義とアクティブラーニングのバランス、公立学校での実習等の機会の保証、教職専門実習で体験する内容など、今後取り組んでいくべき課題についてのご意見もいただきました。教員一人一人が考えていくこともちろん必要ですが、系やプログラムの枠組みを超えて意見を交流し、共通の理解を生み出していく場や機会が求められるのではないかと思いました。

****
内容について、問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。
ＦＤ委員会委員：中（委員長）、小山（副委員長）、樋口、荻野、東村
（事務担当：河原田、村田、長谷川）